高等学校国語

その1

解答はすべて解答用紙に書きなさい。

[一] 次の文章を読んで、(一)～(八)の問いに答えなさい。

アルベエル・チボオデは、文字と書物とを持たぬ公衆の前で朗誦された叙事詩、物語りが、印刷されて室の中で読まれるようになった時に小説が成立したと言っている。この意見は①小説という芸術の性質について多くのことを暗示する。多分小説が印刷術とともに成立した経過は、そのようなもので、西欧においてそうであったように、日本の場合も類推できそうである。物語りが本の形になって室内に持ち込まれても、それは初めは何人かの人間が一人の読み手を囲んで耳を傾けるものであった。しかし、その次の段階として、一人で読むことが一般的になった。チボオデがたどって見せる欧洲の小説成立のそのような歴史から、私は小説の性格を抜き出して拡大することができるように思う。

「室の中で一人で読むもの」という所へ来た小説は、当然室の中で一人で書かれるものである。公衆の前で朗誦されながら伝えられて育った物語りとして、もっとも典型的なものはホオマアの作品であろう。それはイメージが公衆の中にいる時の、分散した気の配り方と多数人の感動の集積としての感銘のしかたを予定したものでなければならないから、その作品の質は室の中で一人で読まれるものとはずいぶん違ったものであるのが当然だ。客観性という言葉で暗示される性質が、そこでは色々な点に、強く現われる。あまりデリケエトなもの、主観的なものは、暗記されるにも理解されるにも不便であったろう。その次の段階としてシェイクスピアの劇のようなもの、それは、書かれる時はともかくとして、演ぜられるのは劇としての種々の制限がある上に、味われるのは一層大きな公衆の中である。それは一人で室内で読む文学作品としては全く不向きな筈であった。自伝の要素などが、それと分る程度に作中に生きることはできなかった。

小説を、誰しも劇の延長としては考えないが、しかし叙事詩のそのままの延長とか甦生として考えることも、十分に危険だ。小説は作者側において、近世以後の個人の解放、自由主義経済の上昇期の個我の権威の確立に伴って生れた芸術であって、印刷術によって広く流布されて成立したもの、と考える今の一般の小説成立観には、②疑わしい空白部がある。勿論それは作る側の衝動の根拠としては十分正しいことだが、私は受けとる側の条件がもっと物を言っていると考えたい。だからチボオデの示した小説の読者のありかたに、小説成立のもっと確かな条件があると考える。

それはつまり小説という芸術では演者と鑑賞者が顔を合せないということである。顔を合せない。そして演者即ち作者は密室で一人でそれを作り演じ、読者は密室で一人でそれを味う。その条件において初めて、他人に言うのをはばかるような内密のもの、罪深いもの、煽情的なもの、告白などがはけ口を見出して書かれるようになり、また読む方も、他人の秘密なひとりごとを聞き、他人の隠したがる行為や考えを知るというセンリツ(ア)を味うようになった。面と向っては話すことも聞くことも工合悪く、他人と一緒にいてはその存在を認め合うことのはばかられる色々なことが、そこで明るみに出る。それは時としては神に訴える罪ある人間の切ない声であり、また時としては、情慾的な好奇心を満足させる打ちあけ話でもある。

そして、そこに近代の小説が成立したと私は考えたいのだ。それでは詩はどうだろう。「誰しも詩の中でしか懺悔をしない。」とゲエテが言ったことを私は思い出す。そこに抒情詩が顔を出して来る。そうだ、私はこのゲエテの言葉を正確に引用できない。それは「誰しも散文では懺悔しない。」と言うのだったかも知れない。だがこの言葉がどちらであろうとも、ゲエテがそう言ったとき、彼は自分の「詩と真実」的な散文を否定したのではなく、③抒情詩が人間の内奥の心の震えを表現する強力な方法であることを言ったのにちがいない。抒情詩は、音楽を伴い、韻律の枠のなかに自己を閉じこめて、ひそかに内奥の情感を吐き出したのであろう。それはしかし、歌謡として他人の前で歌われるザホウ(イ)であったために、その情感の全姿態をあらわにすることができなかった。事実の経緯、そのあらわな姿は、詩においては必ず隠れて姿を現わさないのであった。その部分を音楽が分け持って抽象的に表現したのだろう。そして結末の詠嘆のみが音楽の雲の中にまぎれて鋭く立ちのぼった。それ故、詩は音楽と韻律を身にまとい、アイマイ(ウ)な美しさに隠れ、詠嘆のみによって、嘆き、疑い、愛撫し、訴える自己を表白することができた。

こういう事情は、一般の散文がまだ朗誦的な④叙事詩物語りの記録の性質を帯びていた時代、抒情詩が音楽の附属物として、正しく韻律に服従していた時の、詩のありかたであった。その状態においては、ゲエテの言うごとく、詩は隠れて懺悔する密室、少くとも詠嘆のみは外に洩れることの許された懺悔の座であった。そのようなものとしての抒情詩が、内心のうめきを洩らさずにいられない人々にとって、どんな貴重なものであったか。詩によってしか、人間のひとりごとは洩らされなかった。否、詩の